戦後の俳句

＜現代＞はどう詠まれたか

楠本憲吉編

550

現代教養文庫

社会思想社刊

著者略歴

楠本憲吉（くすもと　けんきち）
1922年　大阪に生る
1947年　慶応義塾大学卒
現　　在　文芸家協会会員，近代文学館理事，慶応義塾大学文学部講師
≪著　書≫　句集「隠花植物」　評論集「昭和俳壇史」「近代俳句」他
≪現住所≫　東京都港区麻布笄町106　TEL（408）0567

現代教養文庫 550　戦後の俳句
© 1966

昭和41年2月28日　初版第1刷発行

編著者　楠本憲吉
発行者　土屋実
本文印刷　株式会社文弘社
製　本　合資会社黒田製本所

発行所　株式会社社会思想社
東京都千代田区神田駿河台3-5
電話代表（292）2611
振替東京71812

担当　八坂安守　田中蠡人

落丁乱丁は直接小社にお送り下されればお取替えいたします

現代教養文庫の定価はすべてカバーに明記してあります

戦後の俳句

〈現代〉はどう詠まれたか

楠本憲吉編著

社会思想社刊

戦後の俳句私観

――序にかえて――

戦後、荒廃の国土に、ひとつひとつ灯がともるようにして、戦時中廃絶統合をしいられていた俳句雑誌がつぎつぎに復刊、創刊され、食糧以上に活字に飢えていたわれわれの詩嚢(しのう)を逐次満たしてくれたあの思い出は、つい昨今のことのようでもあり、また、遠い昔のことのようでもあり、思えば二〇年の歳月はそれほど迅速かつ複雑に過ぎ去ってしまったようだ。

戦後俳壇の話題の第一弾といえばかならず、昭和二一年一一月の「世界」所載の桑原武夫「第二芸術論」ということになっているが、私一個の立場からいえば、同年同月に決定をみた「現代かなづかい、当用漢字」の問題の方に、文語定型の道を選んだ人間として、はるかに強烈なショックを覚えたのであった。決定当時、この問題は「第二芸術論」さわぎの陰にかくれて、俳句ならびに俳壇の痛恨事とはならなかったが、いまにして思えば「第二芸術論」が復興前夜の俳壇に快適な刺激剤として消化されてしまったのに反し、文字と表現の問題の方は、文語定型短詩の前途をはばむ大きな障害としていまなお蟠踞(ばんきょ)しつづけているのである。言葉・表記・文体の重要性に考慮をめぐらす前に、この二〇年の間、俳壇はあまりにも多くの問題が起こりすぎたのであろうか。

私たちが戦後新風の場として参加した「太陽系」（草城・赤黄男・碎壺共同主宰）の生まれたの

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

は、その年の五月のことであった。東論西作というようなこともいわれて、新しい俳句運動はつねに西方から大いに興ると自負していたころ、山本健吉は「批評」に「挨拶と滑稽（こっけい）」論を発表、俳句の無時間的性格という特殊性を解明、明治以降はじめてのこととともいえる画期的な本質論を展開していたのである。

二二年になってからこの論が俳句雑誌上にも登場、富沢赤黄男を盟主として新しい俳句運動に狂奔していた私は、にわかに冷水を浴びたような思いのしたことを鮮かに覚えている。そして、かくなる上はゆくところまでゆこうと決意、高柳重信たちと多行型式の俳句に踏み切ったのであった。

二三年一月「酷烈なる精神」をもって「俳句の根源」を探求、かつ「混沌に秩序を」与うべく、山口誓子を中心に、西東三鬼・平畑静塔・秋元不死男・三谷　昭・高屋窓秋・永田耕衣・橋本多佳子らが集まって「天狼」が創刊された。これはいわば各球団のエースと四番バッターが集まって新球団を結成したような驚異を俳壇に与えたのであった。賓客誓子の去った「馬酔木」へは、かわって石田波郷・石塚友二・石川桂郎ら「鶴」の三石が復帰、戦後俳壇地図がここに出来上がったのである。もっともその間には、沢木欣一らの「風」（21・5）加藤楸邨の「寒雷」（21・9）中村草田[illegible]10）滝　春一の「暖流」（21・4）久保田万太郎・安住　敦の「春燈」（21・1）石田波郷編集の総合誌「現代俳句」（21・9）などなどがきびすを接して創、復刊されていた。

そうした縦の系列とはべつに、横の系列の結成も戦後俳壇の特徴のひとつといえよう。「新俳句人連盟」の結成（21・5）と分裂（22・6）「現代俳句協会」の創設（22・11）などがその主たるものであった。

「根源論争」や「鶏頭問答」（子規の「鶏頭の十四五本もありぬべし」論）がとりかわされた後、昭和二五年六月、石田波郷の病連禱『惜命』と、秋元不死男の戦時下投獄の追体験『瘤』が前後して刊行、この二名著を読んだときの深い感銘こそは、私の終生忘られぬところといってよい。当時、私は貧窮のどん底にあった。二六年三月、平畑静塔の「俳人格」説の載った「馬酔木」三〇周年記念特集号を、買おうか買うまいか、なんど神田の書店の前をゆききしたことか。意を決して買い、日比谷公園でむさぼり読んだことも、思えば鮮烈な思い出のひとこまである。

昭和二七年六月、角川書店から往年の改造社版「俳句研究」に比すべき総合誌「俳句」が創刊された。私はこの「俳句」の編集の任に当たった大野林火の手腕と功績を、この上もなく高く評価する。

根源俳句につぐ社会性俳句運動は、昭和二六年ごろからおこり、草田男句集『銀河依然』（28・2）跋中の発言「第三存在」をへて、二九年から三〇年にかけて急騰したもので、沢木欣一、金子兜太、原子公平らはその実践者としてきわめて誠実な論議を展開、山本健吉はこれをひややかに批判し、『現代俳句上・下』二巻を残して俳壇から去っていった。

社会性論議では当時のいわゆる三〇代俳人の真剣な文章が数多くみられたが、なかんずく「風」（29・11）で示した金子兜太の「俳句と社会性」の一文は一つの見解を披瀝したものであった。この論説が基調となり、彼の「造型俳句論」が生まれ、やがて、昨今の前衛俳句ブームの口火と発展してゆくわけである。

赤尾兜子・堀　葦男・林田紀音夫・加藤郁乎・大原テルカズらのきわめて抽象的な前衛俳句は、

こうした外的必然性と各自の内的必然性とから生まれるべくして生まれた諸作なのである。

さらにいえば、戦後二〇年、結核種のように蟠踞しつづけてきた「俳句と現代語、現代表記」の問題で孤軍奮闘しているのが「青玄」の伊丹三樹彦なのである。

現代俳句は、史上稀に見る活況を呈しているといわれる。俳句否定の相次ぐ痛棒に堪えて「現代」に膚接し続けて来た戦後俳句二〇年の歴史と成果を、この小冊子で回顧展望してみたわけである。

大方の御叱正を待ちたい。

楠本憲吉

◆ 本書を読む人のために

「第一部」では、下段で戦後俳壇の流れを重点的に記し、その記述に応じた俳句作品を上段に並べてみた。上段の俳句は、初出の雑誌、新聞に拠り、初出形態を重んじたため、必ずしも秀句中心ではない。作者の取捨選択を濾過した結果の秀句は、むしろ「第二部」の戦後秀句で選出し、「第一部」に洩れた作や、「第一部」で抽出してあっても、一句一句の周辺に筆が届いていない作について、批判鑑賞し、その欠を補ったわけである。

そういった配慮を頭に置いて、本書を読んでいただければと思い、あえて付言した次第である。

「戦後の俳句」中の＊印は戦後秀句に選出したものである。

何分、乏しい業余を生かしての匆々の所産であるため、不備の点も多いかと思う。読者諸氏の叱正を待ち、向後の補正を期したいと考えている。

目次

戦後の俳句私観――序にかえて――……三
本書を読む人の為に……七

戦後の俳句

一九四五年八月十五日……一四
戦いは熄んだが……一八
俳句雑誌の簇生と俳句否定の風潮……三
「新俳句人連盟」の発足……二九
「[illegible]会」の発足……三
「現代俳句」の創刊……三五
戦後新誌……三九
「天狼」の[illegible]刊……四三

混沌へ秩序を……四六
新人俳句……四八
悠々たる虚子……五一
メーデー俳句と懸賞俳句……五四
石橋辰之助の死……五七
「草田男の犬」論争……五九
「成形前後」と「屍の眺め」……六一
朝鮮戦争勃発……六三
「根源俳句」論争……六五
富沢赤黄男……六八
戦後新季題と俳句……七一
女流俳句の開花……七四
「馬酔木」三〇周年記念号……八〇
口語俳句……八二
二つの俳句賞……八五
「俳句」の創刊……八八

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

松根東洋城の芸術院入り……九一
『石魂』と『銀河依然』……九三
俳句「もの」説……九四
俳句の大作時代……九八
虚子、文化勲章受く……一〇〇
社会性俳句の沸騰……一〇一
「揺れる日本」……一〇八
波郷、「読売文学賞」を受く、その他……一一〇
草城の死……一一一
大政奉還説と群小雑誌整理論……一一四
造型俳句論争……一一六
「読者を持たない文学」……一一九
戦後俳句の一〇年……一二一
「戦後新人五〇人集」……一三〇
虚子翁逝……一三五
前衛俳句の噴出……一三七

安保闘争と俳人……一四三
抒情の回復……一四六
現代俳句協会の分裂……一四九
故人星霜……一五三
第四世代の発言……一六〇
現代俳句の二百人……一六四
久保田万太郎　逝く……一六七
橋本多佳子　昇天……一六八
秋桜子芸術院賞受賞……一七〇
松根東洋城の死去……一七二
戦後俳句は幻影だったか……一七四
新芸術院会員　荻原井泉水……一七七
現代川柳と現代俳句……一七九
十代作家の登場……一八一

戦後の秀句

昭和二〇年……一八三
昭和二一年……一九〇
昭和二二年……二〇八
昭和二三年……二二一
昭和二四年……二三九
昭和二五年……二四六
昭和二六年……二四九
昭和二七年……二五七
昭和二八年……二六四
昭和二九年……二七一
昭和三〇年……二八〇
昭和三一年……二八五
昭和三二年……二九一
昭和三三年……二九四
昭和三四年……二九六
昭和三五年……二九九
昭和三六年……三〇三
昭和三七年……三〇六
昭和三八年……三一四
昭和三九年……三二〇

戦後の俳句

戦後の俳句

二〇年の歳月を生きて流れて来た現代俳句の流域を、実作と理論と現象とで相互に確かめつつ、ここに辿ってみることにする。

俳句は自ら現代性を獲得するために、何を失ない、何を得たか。その時、その所に立ちどまりつつ、この流域探訪の旅に出ようというのである。

◆一九四五年八月十五日

高浜虚子

詔勅を拝し奉り
—小諸にて

秋蟬*も泣き蓑虫も泣くのみぞ

孟蘭盆会(うらぼんえ)其勲(いさおし)を忘れじな

八月二五日の「朝日新聞」に載った、虚子の句である。

昭和一九年九月以来、虚子は信州小諸の山家に疎開、苛烈な戦局と窮迫した生活のさ中にあって、いよいよ花鳥諷詠と客観写生を高唱し、「一切の行蔵寒に在る思ひ」

「冬山路俄にぬくきところあり」(一九年)

「榾の火の大旆のごとはためきぬ」

「山国の蝶を荒しと思はずや」(二〇年)

敵といふもの今は無し秋の月

黎明(れいめい)を思ひ軒端の秋簾(あきす)見る

中村草田男(くさたお)

陽(ひ)が欲しや

などの平常心に徹した日常存問の佳作を詠みつづけていたのであった。

戦時下、虚子は日本文学報国会の俳句部会長の要職にあり、新聞雑誌の求めに応じて多くの戦時俳句を発表したが、それらは俳人としての挨拶の域を越えたものではなかった。

こういった優遊的な俳人格者の境地は、〝戦争も地震も雲煙過眼視する〟奇型文学の実践者を生むものとして、戦後、批判の的となる一方、「(戦争への)抵抗というものは露ほども感じられない。戦争は一瞬のまばたきのうちに、虚子生涯の絵巻の中に加っただけである。」(平畑静塔「昭和の西鶴」昭27・7「俳句」)という批判的な享受者も輩出する動きを見せたのであった。

中村草田男は、虚子門の保守伝統派にありながら、新興俳句弾圧事件(昭一五・二「京大俳句」同人検挙に始まる新興俳人一斉検挙投獄という言論弾圧事件)の強い余波をかぶった一人で、事件の黒幕的存在小野蕪子によ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com